

# 西山樟生

一九四五—二〇一四

一九四五年、敗戦の年の十月十七日、山口県に警察官の西山米作と美智子の長男として生まれる。姉に朋子弟に正顕。両親は不作の年は栄養不足を心配したが、ひたすら明るくお人よしの少年であつたらしい。お勉強が好きで、食べるに無頓着。留守の時などは食わずにずっと本を読んで親の帰りを待った。小六の時に講堂で「山口市の植物分布」と題した発表をし、賞状をもらう写真が残っており、早くから自然に興味を持っていたことがうかがえる。

山口大学付属中学校を経て一九六四年、山口高校を首席で卒業し、東京大学理科I類に入学。



中学生時代の一家



1946年、1歳



山口高校で総代をつとめる



1948年、3歳



一九六六年、理学部物理学科に進学。同期には田中豊一などがいた。理学部の会で登山にも親しむ。

一九六八年、修士課程に進学し、九月に着任した山崎敏光先生のもとで核磁気モーメントの測定や原子核スピンをプローブとする核物性の実験を志した。そのために、電子回路、計算機によるデータ解析、ガンマー線検出器などの基礎的実験技術を学んだ。



ベルリン到着



ナホトカ号で出発



モスクワ空港

博士課程に進学した二九七〇年、山崎先生の紹介でドイツ・ベルリン自由大学のマチアス教授のもとで研究することを決意。横浜から船でナホトカにわたり、そこから列車でハバロフスクまで。さらに飛行機でモスクワに飛び、列車でベルリンにわたった。まずは十月から語学コースでドイツ語の特別を受ける傍ら、すぐにマチアス率いる物理第一研究所の有給の研究員として採用される。労働ビザではなく学生ビザでの渡航だったので移民当局と一騒動あったが事なきを得、四月からは物理学科に学生としても登録。

一九七二年四月、純江がベルリン自由大学生物学科の博士課程学生として合流。翌年三月に長男義春、さらに七三年に次男智明が生まれる。純江の長期入院中に子供を保育園に送り迎えするために自動車免許を取得。

大学ではリーゲル博士と二人三脚でハーン・マイトナー研究所(HMI)やカールスルーエの加速器を駆使して物性研究に従事。励起状態の核モーメント測定などに参加するかたわら、自分の仕事としては徹視的な電場勾配の動的振舞いの解明を行った。

博士論文の執筆は遅々として進まなかったが、一九七九年の夏には純江が子供たちを連日ベルリン市内観光に連れ出し、その間に論文を書き進めた。一九八〇年三月に学位論文「固体および液体金属中の電場勾配の解析」(原文はドイツ語)を提出した。



長男にミルクを与える



次男をお風呂に入れた



何やら計算中





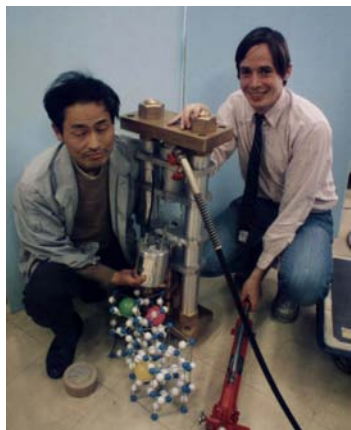
1984年ツェルマットにて

1978年の東京観光

小学校に入ると子供たちは日本語をあまり話さなくなってきた。一九七八年夏には家族を連れて日本観光。延ばすと日本の学校に適応できなくなる、と帰国を決意し一九八〇年東大理学部助教の職を得て帰国。永嶺謙忠用施設の中間子実験室の建設に参加した。当初は東京に住み、無精髭に長靴を履いて筑波に通っていたら早朝の上野で日雇いの仕事に誘われたことも。

一九八三には筑波研究学園都市の官舎に移り、ホンダのカブに重いカバンを載せて通勤するが、マシントイムの睡眠不足で追突事故を起こしたこともあった。

一九八四年の後半は半年近く家族を連れてスイスへ行き、今のポール・シェラー研究所で実験した。



1994年ドーソン氏と水晶の一軸圧縮



1992年北京の国際半導体学会



1993年家族で栗駒山行

一九九〇年、九一年には子供たちが東京に出ると普段は家では二人になったが、たまに家族で旅行も。九二年の北京国際学会には次男がついて来て会議にも参加した。

一九九二年に助教授になり公式に学生を指導することになった。最初で最後の学生は大平聖子さんだった。この中で強誘電体における四重極相互作用の観測を行うとともに、ドーソン氏とは一軸圧縮による格子定数変化と電場勾配の関係を明らかにした。

一九九三年一〇月、父米作を見送ると、そろそろ年老いた母の今後を考える必要が出て来た。将来的に母親を迎えられるよう大きめの家を立てることを決意。土浦市に土地を求め、義弟渡邊一正の力を借りて集成材の骨組みによる新しい構法の家を建てる。建築申請にあたって構造計算の一部は長男が担った。一九九五年竣工。

趣味に割く時間は少なかったが、遺跡の発掘には興味をもっていた。母親の喜寿には姉弟とともに四人で三内丸山遺跡を巡った。その母美智子もまた二〇二三年六月に他界。



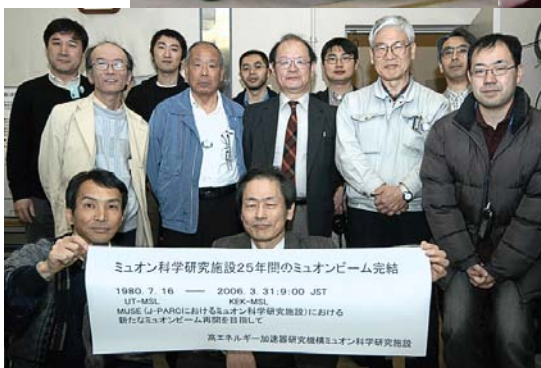
母、姉、弟と三内丸山遺跡訪問



自宅建築現場



二〇〇三年、初孫嵐誕生。同じ頃、茨城県東海村に大強度陽子加速器とそれに付随してミュオン科学実験施設の建設が始まる。つくばのミュオン科学研究施設は二〇〇六年三月に終了した。新しい施設の建設を進める一方で新しい利用者の獲得にも努めた。学会で見つけた単結晶作成のポスターに目を付けたのがきっかけで佐賀大の鄭旭光教授のグループが新しい物質系を持ち込み成果を上げている。



二〇〇八年には東海村のミュオンビーム生成に成功。新しい実験施設は広範な利用者のニーズに応えるべく日々進化している。

一方、じかに会う機会は少ないもののスカイプを通して話したり碁を打つ孫達もかなり成長した。西山樟生の残した足跡は着実に次世代に受け継がれるだろう。



2014年5月30日 グリンデルヴァルトにて

二〇一四年一月二一日没

浄願院樟誉求道居士

となる